

2026年10月
No.９３
農林水産省
北海道農政事務所
北見地域拠点

地域おこし協力隊から、次世代農業を担う経営人材へ
人を育て、未来へつなぐ！



農事組合法人
豊北うるおいファーム
（北見市端野町）

代表理事組合長
平川　千春　氏（右）
専務理事
内木（ないき）　一貴（かずき）　氏（左）

豊北地域の農業を存続させるために



【収穫した「しそ」の はさ掛け作業】

農事組合法人「豊北うるおいファーム」（平川代表理事組合長）は、地域農業における高齢化や担い手不足が進む中、**「この地域の農業を次世代へつなぎたい」**という思いのもと、2019年に地域農家５戸によって設立されました。

設立当初の経営面積は約150haでしたが、離農に伴う農地の受け皿としての役割を担いながら規模拡大を進め、現在では約195haを管理し、地域農業を支える農業法人として着実な発展を続けています。

現在は、もち米、小麦、ばれいしょ、てん菜、大豆、小豆、にんじん、採油用しそなどを栽培しています。なかでも採油用しそは、北見地域のハッカ産業で使用されていた蒸留施設を活用し、地域産業の継承にもつながっています。

地域おこし協力隊から法人経営の中核へ



【作業中の内木氏】
（北見市ホームページから転用）

岐阜県出身の内木専務理事は、学生時代から砲丸投げ競技に打ち込み、大学卒業後も社会人アスリートとして活躍していました。競技引退後は、酪農を営む実家の影響から農業への関心を深めるとともに、以前から北海道農業に魅力を感じていたことや、スポーツを通じた知人が多くいたこともあり、2017年に地域おこし協力隊として北見市に移住しました。

地域おこし協力隊として活動した３年間は、市内の複数の農家で実践的な農業経験を積みながら、地域との関係づくりに取り組みました。その経験を経て、2020年に「豊北うるおいファーム」へ就農しました。

就農を決意した理由の一つは、**「繁忙期にはしっかり働き、冬季にはまとまった休暇を取得できる」**という、北海道の畑作農業ならではの働き方に魅力を感じたためです。現在は専務理事として法人経営の中核を担い、スマート農業技術の導入や人材育成に取り組んでいます。

人材確保と定着を見据えた職場づくり

「豊北うるおいファーム」は、働きやすい職場環境づくりに取り組み、人材の確保だけでなく定着にも力を入れています。
現在、社員８名とパート従業員６名が勤務しています。子育て世代が働きやすい柔軟な勤務体制に加え、道外出身の従業員が冬季に帰省できるよう長期休暇を取得しやすくするなど、従業員が働きやすい環境づくりを進めています。

採用活動では、「新・農業人フェア」への出展や、地域おこし協力隊の受入れを継続しており、現在の社員には、内木専務理事を含む２名の協力隊出身者が在籍しています。

また、採用前には農業体験の機会を設け、実際の作業内容や地域での暮らしを体験してもらうことで、就職後のミスマッチを防ぎ、人材の定着につなげています。



【新・農業人フェア出展の様子】

さらに、**将来的には単なる労働力の確保にとどまらず、法人経営を担い、地域農業を次世代へ引き継ぐ人材の育成を目指しています。**

地域の理解を得て進めたドローン導入



【ドローン作業の様子】

GPS自動操舵トラクターや農業用ドローンなどのスマート農業技術を積極的に導入しています。
その中心を担うのが内木専務理事です。オホーツク管内でも早い段階で農業用ドローンの操縦資格を取得し、ドローンを活用した農薬散布を推進してきました。

導入当初は、新しい技術への不安や実用性について周りから慎重な意見もありましたが、説明会や実演を重ねながら理解醸成に努めた結果、ドローン散布の効率性や防除効果が評価され、現在では地域全体に定着しています。

現在ではスマート農業技術の導入は、作業負担の軽減と省力化を実現し、限られた人員で農地を維持していくための重要な手段となっています。

若者が帰って来られる地域を目指して

「若い人が帰って来られる地域をつくりたい！」
それが「豊北うるおいファーム」の目指す姿です。

その実現のためには、「農業の発展と地域の魅力向上を両輪とし、人とのつながりを育みながら地域の活性化につなげていくことが大切です」と語ります。

その一環として、冬季には農業ハウスを活用した陸上クラブ（オホーツクAC/キッズ）の活動や地域イベントを開催し、地域内外との交流人口の拡大にも取り組んでいます。



【うるおいファームの農業ハウスで練習に励む子どもたち】

<自社ホームページ>

<自社Instagram>